

2024年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・一般選抜) 問題

外国語試験 日本語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

成	
績	

2024年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(夏期・一般選抜) 問題

外国語試験 (日 本 語)

1、次の文章を読んで、後の問に答えよ。

日本の中世と近世の精神世界に、(A)とりわけその美的造形の領域に——言葉によるそれと形象によるそれとを含めて——「切れ」とでも呼び得るような事態があらわれています。連歌や発句でいう「切れ字」は、この切れをまともに表現した概念です。建築や庭園、絵画、彫刻、といった分野にも、同じ事態があらわれています。切れの第一の意味は簡単にいえば、人間が手を加える以前の自然性を人間が芸によって断ち切ることです。発句の一つの例でいえば、「古池や蛙飛びこむ水の音」という有名な芭蕉の句がありますが、その中の「古池や」という言葉の切り方がそれに当たります。目前の情景としては、古い池があつてそこへ蛙が一匹とびこみ、ぷしゃんとかべちゃんとかと水の音がしたという出来事があるだけです。その水の音を含んだ自然界の出来事は因果関係のつながりによる一つの連続した出来事です。そのつながりが「古池や」という文字で切られるわけです。ここでは「や」が切れ字に当たります。この切れ字によって、古池に蛙がとびこんだという情景がいわば区切られてわれわれの目前に浮かび、因果のつながりの中で水の音だけがことさらにひびいてくるわけです。

切れの第一の意味とは、人間が手を加える以前の自然の連続性を切ることですが、しかし^Aただ断ち切ることではなくて——たんに切られた自然性が蘇って生きてくるように——切ることです。ある熟達した芸がそこに必要となります。芸の深まりは切れの深まりであり、切れの深まりに応じて自然性の深みが芸の内にあらわれてきます。芭蕉ははじめ「蛙飛びこむ水の音」という部分をまず(1)調んだといわれます。そうすると、傍にいた弟子の其角が「山吹や」という上の句を作りました。

山吹や蛙飛びこむ水の音

しかし芭蕉はその案を採らずに、

古池や蛙飛びこむ水の音

と定めたわけです。『葛の松原』には次のように記されています。「しはらく調^{しらべ}ひ之^{これ}、山吹といふ五文字は□にしてはなやかなれど、古池といふ五文字は質素にして美也」。

蛙が水にとびこんだときの同じ音が、其角の耳には□にしてはなやかな山吹の花と一つの音であり、芭蕉にとっては(2)質素にして美の古池の音として聞こえました。どちらもそれぞれの切れをくぐってひびく音です。同じ一つの自然的世界が、芸の切れの深まりと方向とに応じて、それぞれの仕方であらわれてくるわけです。言葉で表現する以前の「水の音」の自然的世界そのものが、限りなく多様の壁と深みとを内に量みこんでいるといえます。

もちろん、自然世界のさまざまな次元を表現するというだけなら、それは特に「切れ」に限ったことではありません。カントもいのように、芸術は、それが同時に自然であるかのように見える限りで芸術であるとも考えられます。いわゆる写実主義などは特にそういう立場を強調したものですし、また外界の対象を写実するよりも内面の造形意志を表現しようとする主観的な表現主義でも、自分の内面世界のあり方を表現するという意味では、やはり自然を——内的本性という意味での自然を——表現することだといえます。

われわれがここで「切れ」と呼んだ事態は、作品を自然であるかのように見せる写実とは異なっています。写実の場合には、写実する側とされる側とは、いわば主体と客体との関係にあります。主体である芸術家が客体である物を写実的に描くとき、芸術家ははじめから主体というあり方をもち、物ははじめから客体として見られています。それによって客体が新しく見られるとか主体のあり方が変わるとかということはそこではありません。しかし「切れ」とは何よりも、主体自身が自らの日常的・自然性を切つて自己についての④自覚に達するところであられます。ここに切れの第一の、さらに⑤立ち入った意味があります。^Bこの第二の意味は、自然という語の第一の意味、つまり山河大地の自然から転じた、物や人の本来の自然本性という意味での自然です。その自然は日常世界の中ではたいていは自覚されないままに終わっています。日常世界もある意味では自然な世界ですが、その日常的・自然性を修行とか訓練とかによって突き抜け、これを切るところに、本来の自然性があらわれるといえます。芭蕉は「古池や……」の句とともに④風雅の正道を見つけたともいわれます（参考『俳諧十論』所収「俳諧入伝」）。その⑤しづみはともかく、この句における切れは、芭蕉がそれまでの談林風の自分のあり方を「切」つて芭蕉自身となり、彼の自然本性にもとつたことによって成立したといえます。自然的世界が限りない多様性と深みをもつということは、この場合にも妥当します。

（大橋良介『「切れ」の構造 日本美と現代世界』〈中央公論社〉による。282～286頁）

問一 傍線部(1)～(5)のカタカナは漢字に改め、漢字はその読みをひらがなで記せ。

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

問二 二重傍線部(A)「とりわけ」とはほぼ同じ意味をもつ語を、本文中からひらがな五文字で抜き出せ。

問三 二重傍線部(B)「立ち入った」とあるが、「立ち入る」ということばを用いて短文を作文せよ。

問四 空欄に共通してあてはまる最も適切な語を次の中から選び、○で囲め。

- ① 冗漫 ② 風流 ③ 枯淡 ④ 素朴

問五 傍線部A「ただ断ち切るのではなくて、一たんは切られた自然性が蘇って生きてくるように、切ることです」とあるが、それはどういうことか。芭蕉と其角の発句を例にあげて、本文に即して説明せよ。

問六 傍線部B「この第二の意味は、自然という語の第二の意味、つまり山河大地の自然から転じた、物や人の本来の自然本性という意味での自然です。」とあるが、それはどういうことか。「切れ」と「写実」の異なりに注意しながら、本文に即して説明せよ。

一 問一 二に答えよ。

問一 次の文中の空欄 ① ～ ⑩ に当てはまる平仮名一文字を入れよ。答えは文中の () 内に直接記入せよ。

季節の訪れを正確に知ることは出来ないか。

「新しい生き方」 ① () 始めた人類は、切実にそう考えた ② () 達はいません。「新しい生き方」とは、それまでの狩猟採集とは一線 ③ () 画す「農耕牧畜という生き方」のことです。この生き方の転換は、地球というシステムにも、大きな変化をもたらします。生物圏から人間圏が分化し、地球システムの構成要素 ④ () 変わるようになるからです。

約一万年前にホモ・サピエンス ⑤ () 始めたこの生き方が、現代にまで続く「文明」 ⑥ () 始まりです。最初の文明人である彼らにとって、種まきの時期や、定期的にやってくる雨期と洪水、あるいは乾期の日照りは、つねに悩み ⑦ () 種でした。季節の訪れを知る正確な手がかりを、「文明」によって生きようとする彼らは必要としました。

経緯上彼らは、季節が周期的に訪れること ⑧ () 知っていました。季節は移り、同じようにそれを繰り返す。問題は「いま」 ⑨ () 「いつ」 ⑩ ()、その変化は「いま」からどのくらいあとにやってくるか、それを、そしてまだ、その方法を見つけることでした。

(松井孝典『文明は〈見えない世界〉がつくる』(金波書店)による。2～3頁)

問一 次の文中の空欄 ① ～ ⑩ に当てはまる日本語表現を直接記入せよ。なお、一箇所ある ⑨ には同じものが入る。

心の発達とは、「受精から人生の終わりまで、時間の経過にともなっておこる心の内の変化」をいいます。これが現在広く使われている
①) です。発達とは「変化」を問題にしますので、能力が高まり、②) を迎え やがて衰えていくとい
うすべての変化の ③) をいいます。

この変化の姿態は複雑です。つい最近まで、発達はすべての能力が20歳くらいで ④) に達してその後はゆっくり衰えて
いくという、物を導くに投げた時にできる ⑤) を描くような一本の経路を ⑥) と考えられていました。

⑦)、⑧) が進んでくると変化は心のいろいろな領域で、生涯の ⑨) 時期にも

おこっていることがわかってきました。⑩)、知的な能力、他人と接する対人行動、社会のルールや仕組みの理解、さらに

は、設備や道具を使う能力など、さまざまな領域が考えられます。そして、それぞれの領域にはさらに下位の領域が考えられます。これらの領
域や下位領域でのたくさんの変化は、一斉に始まるわけではなく、いつたん始まった変化がやがて終わることもありますし、本人の

⑪) でやめてしまうこともあります。高齢になっても続く変化もあります。そして、変化の大きさもそれぞれです。

(高橋豊子『子育ての知恵 幼児のための心理学』(信濃書店) による。2頁)

三、次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

技術を人間の能力を高める道具と見る見方は、ハラリーが、今日の新技術について次のように述べる場合にも当てはまる。

彼はいう。神を追放した近代社会は、人間を世界の中心に据えた。人間は、高度な理性と想像力を駆使して自らの環境を自らの幸福のために造り変えてきた。だが、この「人間至上主義」は、ついに最後の領域にまで手を染めるに至った。生活を便利にし、自由を拡大し、富を蓄積してきた人間に最後に残された領域が、寿命や生命そのもの、それに知的な能力に関わるもの、つまり、「人間そのものの高度化」であった。

そこで、生命技術によって死を克服し、知能を最大限に高め、人工知能(AI)を人間の代理として人間のなしえなかった事柄を実現しようとしている。つまり、人間は自らが生み出した技術という道具を最大限に活用して人間の「完全性」へ向けて飛躍しようとしている。自らが神になろうとしている。こういうのである。

人間が人間を超えようとする。これは一種のパラドックスであるともいえるし、人間の根源的な欲望への回帰ともいえるだろう。ニーチェが洞察したように、「神を殺した」人間の無意識の欲動が、神の完全性に対する人間の深いルサンチマンにあつたとすれば、神の殺害動機は、神になりたい、という人間の常軌を逸した願望に発するとしても不思議ではない。

そして、自らを「神」の位置につけることを企む人間は、何とも皮肉なことに、人間自身を脳内の情報処理と情報伝達系へと縮減し、最終的には、自らをあらゆるデータの中に溶かし込んでしまうのだ。神に近づこうとする人間は、実は人間からそのもつとも「神的なもの」つまり「精神」を奪い取ることになる。ハラリーはそれを「データ教」という。「精神」は「データ」に置き換えられる。確かに、偶然的なもの、偶発的なものを排除して「完全性」を求めれば、確実なものは、ただただ蓄積されたビッグデータだけ、ということにもなろう。

これでは人間はほとんど脳科学やAI技術、コンピュータの奴隷ではないか、といたくもなるが、それにもかかわらず、人間の合理的能力の信奉者は、世界の主体はあくまで人間である、という考えを手放そうとはしない。神のごとき完全性を手に入れることは、絶対的な自由を手にすることであり、技術こそがその自由を現実化する手段だという。

そうだとすれば、仮に人間の生み出した技術が何か大きな問題をもたらすとしても、この同じ「人間至上主義」によって、われわれは、それを解決できるだろう。なぜなら技術の「主人」はあくまで人間だからだ。技術を適切に使うことで技術のもたらす隘路からも脱出できるだろう、と楽観主義者はいう。人間の理性とさらなる高度な技術が問題を解決するだろう。彼らはこういう。

しかし、われわれは誰もが、事態はそれほど容易ではないことを知っている。理由は簡単だ。もともとこの世界において、「人間」だけが世界の外に立つて平然と超越的な立場におれるはずなどないからである。まさに「人間」は、「世界の内にある存在」であつて、常に環境との相互作用の中で生きている。環境に働きかけるために人間が生み出した装置が技術であるとすれば、それが意味するのは、人間と技

術は切っても切れない相互作用の関係にある、ということであろう。この単純な一事をとってみても、人間が技術を生み出すと同時に、人間は技術に規定されるほかないことがわかる。したがって、技術が環境に作用する度合いが高くなればなるほど、人間はそれだけ多く技術に規定されることにもなる。まさしくそういう矛盾した両義性を人間に強いるのが近代社会なのである。

これは人間中心主義でもないが、また技術中心主義でもない。人間が技術を生み出すのでもないが、また技術が人間を支配するというわけでもない。そうではなく、人間が理性能力を持ち、その理性の産物である科学によって環境を技術的に管理できる、というような思考方法そのものが、「何か」によってわれわれに与えられているのだ。人間は主体として技術を管理できる、という思考方法へとわれわれは「何か」によって駆り立てられているのだが、その「何か」がすでに技術と深い関係を持っているのである。

かくて、人間と技術の間にひとつの循環するループが出来上がり、すべての活動がその中へと囲い込まれてゆく。人間も技術もそのシステムへと追いつまれてゆく。技術を自由に管理できるという偽の期待に幻惑された人間理性も、このループに取り込まれてゆき、このシステムから独立した人間理性などというものはありえない。ループに取り込まれる過程で、理性そのものが技術的となるのだ。理性はもはや、決して、超越的に世界を分析できるようなものではなく、それ自体が、技術的作用を余儀なくされるのである。

(佐伯啓思『近代の虚妄 現代文明論序説』(東洋経済新報社)による。 299 ~ 301 頁)

[illegible]